

湯
川
實
記

源 甲

氏 斐

湯

川

実

記

目次

一、武田三郎武勇之事	1
一、湯川民部少輔教興寺表にて討死之事	2
一、湯川・玉置手取軍之事	4
一、直春小松原退去付所々軍之事	6
一、小松原落城寄手向う事	7
一、直春小松原の恥辱を雪ぐ事	10
一、湯川・山本謀殺され給ふこと	11
一、芳養泊城攻之事	13
一、能城系圖	17

源甲斐
氏湯川實記

武田三郎武勇之事

爰に紀州日高郡龜山城主湯川十二代中務少輔直春の先祖を尋めるに、甲斐源氏の末葉に武田三郎といふ人あり。弓箭武勇の達人にして、其名世々に秀た里ける。或人の讒言によつて勅勘を蒙り、紀州熊野の湯川に遠流をされ、年月を送り給ひけり。其頃熊野に賊徒阿里て近辺を押領し、熊野参詣の貴賤を悩し民の煩ひと成りしかバ、帝朝より度々討手を差向けれども、山林に隠れ居て責亡しかくれる所、武田三郎夙と旦ハれけるハ、我熊野に處ながら賊敷尤下の奴原に多くれ、人民を煩ハ志むる事我家の恥辱なりと、ゐかにもして亡ぼさむやと思ひ、守代の太刀を帶し謀を巡し、小勢を以て彼賊徒をかり出し、むつと組んで谷底にどふと落取り押へ首を搔んとされけるが、太刀ハ抜て鞘計り残りける。其時武田三郎心中に観念し、歸命頂礼三所大權現と奉念上の方を見上候へば、不思議やか太刀岩の上に留りたりけり。此太刀おのずとすべり落て、三郎が手に渡りしかハ、彼賊徒の首を討落として、余黨悉く退治し帳本をからめ捕て則帝都へ指上しかバ、帝叡感有て勅勘を免され剩牟婁郡を賜り、今の田邊の城下芳養浦に内梅うちうめといふ所有。其所に住居し玉ひける。其時帝都より此太刀岩すべ迂りの名劔と改名あらせられける。二代目ハ天心道誠、三代目ハ武田弥太郎法名祖印宗源、此弥太郎ハ勇力人に勝れ、弓矢・打物肩をならぶる者なかれける。我程の人世にあらじと侈奢慢心深かりけり。天狗其の心をや伺ひけん。或時弥太郎湯の峯の風呂へ入れける処に、天狗形を変へて人間と成り、同く入湯しけるが弥太郎もさすがの者、夫と識りながらさあらぬ躰にもてなし、金剛力を思い當られしかバ、天狗程なく退散志たりとか

や。其時天下大に乱れ後醍醐の天皇の勅命に依て宮方大將新田左中將義貞・楠判官正成、武家の大將足利尊氏と合戦止時なし。紀伊の國の八庄司湯川・玉置・恩地・牲川・貴志・荒川・湯浅・田邊の別當・其外世に名有士は皆宮方に成りし処に、弥太郎如何思はれけん、尊氏に属し度々武功あるに依て、尊氏將軍の世に成て、紀伊の國の内在田・日高・牟婁三郡の内を賜り^{六万石を領ス。}日高郡龜山の峯に城櫛構へ^{今の丸山是なり}紀伊國旗頭として代々足利公方へ仕へ給ひけり。四代八天源宗泉、五代八天章慶祐、六代八湯白源清^{トウハク}、七代八天龍源譽、八代圓戴觀公、九代八河宗純^{上八代ハ記し置へき事もなかりける。また覺書もなかりけるや、俗名なきなき故不殘。}又[？]口十代八宮内少輔政春^{法名岱宗健春}此政春ハ一方の大將もなるべき器量といひ、殊に歌道に勝れしかバ、尊氏十二代の將軍法住院殿義澄公の^{當足利十二代万松院殿義澄公に仕るに依て義澄と有口弟と記}代に御前へ召出され、南方副將軍に御仰付られ、錦の直垂^{ひたれ}を賜りけり。或時政春岩すべりの太刀を取出し、罪人を伐らせ給へハ少も切れざりけれハ、武士の重宝にならずとて麻の中に投捨ぬへバ、麻^{みすから}自と切れにけり。夫から麻切丸と改名候。又是の太刀を拔玉へハ、かうろぎ則飛掛れハ二ツに切れける故から、かうこぎの太刀と号を玉ひけり。是より二ツ太刀・錦の直垂家の重代と成り、湯川家に傳れり。

湯川民部少輔教興寺表にて討死の事

十一代民部少輔直光^{法名岸宗吉}祥の代迄龜山峯在城し玉ひしが、山高うして風雨裂敷防へき便りなく寒風肌を被りしかバ、小松原の屋形へ城を移し、常ハ小松原に住

居し玉ひけり。されども堀も矢狹やひまもなかりける処に、子息直春の代に至りて三郡の人夫を集め、堀をほり矢狹をあげ城柳堅固に成しける。今の小松原 其頃畠山 子安の社は也

高國子息右京太夫高政ハ、和泉・河内・紀伊三ヶ國の守護にて、河内國高屋に在城し玉ひける。湯川・玉置ハ公方へ出仕を致され、高政の幕下なり。其外の面々ハ湯川の旗下にて、高政へ出仕されけり。然る処に阿波國三好修理太夫ハ叛逆により、高政當國へ下向して湯川を頼まれけハ、根来寺の宗徒も駆來り、和泉・河内・紀伊國三ヶ國の勢を催し、数千の軍兵を引具し泉蒔久米田に押寄、三好実休を討取、夫より三好修理太夫が楯籠る飯盛の城を、十重・二十重に取巻て、四月五日より五月十九日迄息をも継かずせ免けれ度、要害堅固なりしかハ攻あぐみける所に、剩三好の舍弟摂津守天王寺へ討入戦ひしかバ、かなわじと思はれけん。高政高屋へ引とられけるが、摂津守に隔てられ今ハ叶はぬ所と見定め、郎等にむかつて今こそ我等が最後なれ、敵に後を見すへきか摂津守を討取と下知せられける。目良次郎堪清・同五郎堪経兄弟は屈くつ竟きやうの強弓引の手利てきにて、指詰引・詰射たりけれハ、矢場に十六騎討落し、矢種尽けれハ大勢の中へ駆入て、能敵数多討取遂に討死したりける。直光是を見給ひて、進めや者共とて真先に駆入玉へバ、其手の者共大將討せじと、我先にと割て入駈合て戦ひける。おめきさけぶ其の聲、敵味方の鉄砲の音ハ大山も崩れ、太刀・長刀の閃らめく影ハ、電光の如く也。敵を六七度程に追まくり、暫く息を継玉ふ。三好の首を見ざるこそ遺恨なれ。扱誰々討連たると見給へバ、たのミ切りたる一族郎等の過半討連たり。爰に郎等の内に林重左衛門は、其日の侍大將を蒙りて軍の下知を致けるが、味方大半討連しかハ、今ハ是迄とおもひ直光の御前にひざまつきて、最後に今一度君の御尊顔を拝し奉度、其後討死仕らん爲是迄参り候と、涙を流し申もあへず其のま、堅角太夫と名を替て、大勢の中へかけ入て思ふ儘に軍して、狂ひ死に給ひしたりける。直光是を御覽して、今ハ命存へなにかせんと、敵の中へ駆入敵六騎を討取、三騎

湯川・玉置和佐取手軍之事

に手を負せ、小高き所へ上り腹切ぬき口腹かき切て死し玉ひけり。此の年の戦ひに直光を始として、舎弟湯川帶刀是九郎助・親なり・湯川右衛門太夫兄弟・同甚太夫・湊上野・同紀助郎等にハ丸山孫四郎方勢井・村井以上其ノ外七拾三人、國衆にハ目良兄弟・山際三郎・神保・安宅・貴志・白樫・富田・飯沼九郎左門・龍神・刑部彼是五十四人、根来寺人数貳百余人討れけれハ高政も力なし。目良左京引具して高屋の城を退れけり。三好方にも勝軍ハ志たれども、一族郎等名有者共多く討連ける。

湯川十二代中務少輔直春

法名

光岸
淨照

父直光討死の後も威をたくましふして、小松

原の城に住居せられける。郎徒を集め評定をせられけるハ、紀伊國の武士共ハ一向に秀吉公へ随ハさるの爲、近日討手指向けるの由。内々其間こゑあり、討手を引受合戦せんや、又ハ秀吉公へ随ハんやと衆口取々な里けるが、直春如何思はれけん、一向秀吉公へ随ふ心底なかりければ、玉置庄司ハ直春の聲なりけれハ、和佐の城へ使を立て、秀吉公へ敵対の由申含メ遣し申されける処に、曾て同心なく秀吉公へ合對の由使ひ歸りて申けれハ、直春大ニ立腹有り、此上ハ和佐の城へ押寄即時に踏潰し、然りといへども親となり子と成事、前世の宿縁浅からず、我最愛の娘を敵陣に置ん事ふ便なり。所詮娘を引取て玉置と一家のよしみを離れ、其後一戦に及へしと、迎ひの使を立られけり。玉置の妻使に對面して申されけるハ、親子引別れ敵味方と成事、天の恐れも悲しく候へ共、夫妻の縁を結ひ年頃相馴し身の今、此節におよんで何ぞ夫トを見離し申さんや、若し一命を惜ミ夫トを見捨てハ永ク湯川の名を穢し却而不孝の身と成へし。たとへ玉置殿を見捨申しうへハとて負させ玉ふへき軍に勝せ玉ふへきとも阿らず。又父の仰を背き玉置殿を

見届候とて勝せ玉ふへき軍にまけさせ玉ふへきにも阿らず。父の名を上る道理にもあらず、其上我ハ女の事なれハ、矢一筋の便りともなるへき身にもあらざれハ、和佐城を枕として、免にも角にも罷^{まかり}成へしとこそぞんじ候。父も是程の道理に迷ひ玉ふべきとも阿らず。流石恩愛の悲しさに、さしも極記大將なれども迷せ玉ふ御心の内こそ有難けれと、両眼に御泪を浮め玉へハ、侍共も共に涙を流し感じける。此趣能々申して、汝重ねく御使に來らハ、女なれ共御使とハ申間敷と存しかハ、使も力なくすごく立歸り、斯と申上げれば直春公も御泪を浮め、扱々力に及ハぬ事共なり、さらハ手分を定んと軍大將ニハ

嶋 右馬之允

相從ふ侍ニハ

古田 外記

脇田 藤六

林 若太夫

玉井 善右衛門

丸山 主計

茨木 塩路

高垣 七郎右衛門

右之面々先手として、都合其勢式百余騎取手の城へ押寄、鯨波の勢を上ケたりける。玉置方も兼て用意の事なれハ、川を隔て、弓・鉄砲を揃へ待ちかけたり。折節川水少し増しければ、嶋右馬之允下知して、此川さして大水にもあらず、案内ハ知たり、渡せや者共と真先駆て打渡る。城近く押寄火花をちらし戦ひけるが、中ニも高垣七郎右衛門ハ諸軍勢ニ先達て戦ひけるが、敵の射る矢に額の真中を射られ、流る、血汐両眼に入爲戦ふべき様なかりけれハ、力なく戸板に昇乗らせ我住家へ販りける。一族郎等集りて其矢を抜んとすれ共ぬけざりけれハ、鍛冶の鋏を以て矢の根をはさみ、御免阿れといふ儘に双髪を踏へつゝ、ゑいや川と引けれども猶喰志めて抜けざりけり。高垣元來死生志らずの男なれハ、鑢を以て摺切んといひにければ、肉の際を境にして摺切てぞ捨にける。其疵癒て三年の後肉腐り、膿出て矢の根自然とぬけ出たり。扱も城内の兵も弓・鉄砲を揃へ、おめきさけんで戦ひたる。されとも寄手大勢なれハ入かへく責け連ハ、城兵も過半討れ玉置

叶わすや思ひきん急記飛脚^{いそぎ}を立、湯川叛逆のよし秀吉公へ註進志たりけり。是によつて紀伊國退治として、秀吉公より討手差向けらる由。聞へしかハ大事の前の小事なり。迺先此軍ハ指置くとて湯川も小松原の城へ引返されたり。

直春小松原退去ニ付所々軍之事

此日天正十三年秀吉公より討手として、大和大納言秀長公・羽柴中納言秀次公数万騎引卒し紀伊國へ指向ふ。三月廿四日根来寺を攻落し、同月太田の城を取巻て三方に堤を築。紀伊の川を塞留て水責に落し玉ふる。仙石權之助・尾藤久右衛門海陸より責入るのよし聞へしかハ、小松原の城へ寄せ集る人々には湯川權現・宮崎右馬充・下芳養伊豆式部太夫・林入道栄仁・湊右京・神保・高垣・白樫・津村・脇田・龍神・岩代・丸山・山路・目良・愛須・万呂・横矢・真砂・安宅・周参見・小山・高尾一人も残らず群集志たりけり。直春對面有て軍評定とりくなり。湯川安藝守直春を謀て申されけるハ、小を以て大に敵せずと古き文も見へたり。今太閤秀吉公ハ天下を合する勢ひなれハ、中々始終運を開く事かたかるへし。日頃申如く兎にも角にも秀吉公へ随ひ玉ふへし。左ならんにおひてハ永々湯川の家は落果るへし。是家全ふする謀なるべし。方々は如何に思れ候やと申さ連しかハ、直春氣色を正して申されけるハ、當家ハ武田源氏の末流として、當國に住する事我に置いて十二代、未武勇の名を落さず。一戦もせずしておめくと降参せん事末代の恥辱、中々思ひもよらず先祖の名を穢すに似たり。此上ハ海上ニハ兵船を浮免、山林ニハ伏勢を置、陸ハ藤代・蕪坂・鹿ヶ瀬切所へ人数を出し、敵責来るハ在所を志らさず引籠り、思ひもよらぬ方より駈出し、案内知らぬ上方勢を思ふ儘に一兩年も責悩し、其上にハ運を天に任すへしと思ふハ如何にと宣へハ、何連も此儀に同じける。

小松原落城寄手むかふ事

湯川の一族評議一決し、此上ハ雜賀表へ出張すへしと海陸手合を定められたる処に、はや在田・雜賀の邊ハ敵山野に充滿たるよし、阿わたべし九告げ来り、実に陸ハ藤代、海ハ比井・三尾の沖迄寄手雲霞のごとく見へしかハ、直春此程の長詮議に、敵難所を越られ如何にすへ記やと、いらち玉へハ安藝守申れるハ、大軍を引請何の方便もなく、此城を枕として戦ふへきに阿らず。先々熊野の奥へ引籠り、難所以待受戦ふへし。はやく早くと勸れば、直春も力なくさらハ城に火を懸よとて、煙と共に燃上り目ざましか里ける在り様なり。老若の男女・妻女をハ皆山林に隠し置、取る物を取阿へず小松原の城を焼捨て落られける。相従ふ侍にハ

直春
伯父

湯川安藝守

直春
弟

湯川次部少輔

上野
城主

湯川式部太輔

芳養泊り
城主

湯川熊之助

野島ノ
領主

湯川左近太夫春房

平井掃部春頼

嶋右馬允弘春

脇田六郎右衛門俊秀

(式部少輔之子息)

脇田藤六俊勝

古田外記

岩代右衛門太夫

津村式部丞信秀

栗山次郎三郎

林源右衛門春尚

丸山主計定利

丸山與次郎新兵衛

玉井善右衛門

玉井新兵衛

高垣七郎右衛門

都合主勢貳百余騎。三月中旬小松原を打立て其夜はやの泊の城へ着ニける所、又敵後より寄来ると聞へしかハ、志のめ明行頃龍山に分ケ入忍ひ玉ひける。脇田・高垣・玉井彼是七騎の者ハ、泊りの城より取つて返し南部崎へ駈上り、上方勢を見渡セハ、寄手の先陣はや岩代浦へ押寄せたり。林源右衛門申けるハ、眼前に見逃さんも口惜しい也。我々の弓勢の程を見せん込、難所に敵を待受てさんぐに射たりけり。寄手大軍成りといへども、纔の敵に射立てられ岩代の在所へ引返す。七人の者共ハ爰にて討死せんよ里ハ、耆騎成共主君の御供申さん込、又峠よ

り引返し、龍山に分ケ入けり。既にその日もくれ夜にあれば、鎧の袖を片敷きて、其夜は山に明し玉ひけり。直春脇田近付て、かゝる落人の身と成て、譬ていふへきニハ阿らね共、昔鎌倉殿石橋山の伏木ニ隠れ玉へとも、我ニハ天に跼り地にぬき足して身を寄すべき所もなし、又運を開ん事あるへからず。藤代・雜賀に向ひに出張して免ニも角ニも成へきに、詮無事長穿義取出軍に日数を経てと、臍うでを噛むに益なしと宣へハ、脇田仰承り尤至極の去なから、悔ませ玉ふ扁からず。只人ハ名こそ惜く候へ、まづ何方へも落行難所に敵を待受、命を限りて戦ひて天運に任すへしと申しければ、然らハ汝近露六郎方に参り、かく斯と頼むへしと宣へバ、尤然るへしと急ぎ走り行き、六郎に斯と申されければ、争で此節見放し申へき、日頃の御恩にハ一命を奉るべしと、家の子・郎等等引具して御迎ひに出にけり。脇田ハ先へ駈抜て龍山に参り、六郎二心な記よし申ければ、直春大ニ喜悦有て、頓て六郎の館に入玉ひ、人数を集め弓・鉄砲を揃へ、用心厳敷見へにけり。扱目良淡路守ハ流石堪増の末葉なれば、爰こゝ彼処にて討たれなば、万人の嘲も有へしとて、手勢を計り引具して、秋津川の峯の城へ引籠り、敵寄来りハ一合戦して、上方勢に手並の程を顕ハし、腹搔切名を後代に残してこそと、思ひ定扣へれハ、阿わてたる景色ハなかりけり。寄手の大將にハ仙石權之丞・尾藤久右衛門・藤野與五右衛門・蜂巢賀彦右衛門・宇野若狭守・青木勘兵衛・杵若越後守其勢三千余騎。牟婁郡田邊ニ押寄神社佛閣に至迄、一字も残らず焼拂ふ浅間敷次第に、老も若きも諸共に皆山林に遁隠しハ、只狩場の鹿に異ならず。他國ハ搔乱るゝといへとも、熊野の内は是迄靜にて、合戦といふ事音にのみ聞きし計りなるに、今かゝる矢乱れ来しハ、あらしに蜘蛛の子を散らす如く、親は子を尋ね・子ハ親にはなれ、貴賤山野に遁迷ひ、目も當られぬ有様なり。秀吉公ハ天下を手に入玉ふといへ共、多くの人を亡し、靈神・靈佛を焼亡し玉ひし事、子孫の冥利如何阿らんと、浅猿かりし事也。扱先山本を踏潰せと、一の瀬へ越後守を大將とて、長片山の行川下より真先に責上り、三寶寺前の河原に陣を取抑、此城と申ハ龍松山を後に取て、

北ハ峨々たる岩石、三方ハ沼、麓ハ竹藪生茂り、前は川流れたり。十町計り出張りし川のこなたに扣へたり、山本權之丞・井潤清助・山本内近・鈴木刑部四人乗廻し鉄砲を打せける。寄手の方も足輕に下知して、鉄砲を打せける處を、廣田福右衛門甘蕪矢取て打つかひよつ引敵やろと切て放つ矢、敵胸板を討通し、馬より下にどうと落、三栖市之丞も芦毛の馬に乗りたる武志一騎討落候。敵是に腹を立川を渡さんと志けれ共、案内ハ知らざりけん。少し猶豫して扣へける處に、熊代左近川端に立ち寄り申けるハ、此川さして大水ニてもあらず共、折節山奥に雨降りけん、谷の落水落集り漲る水岸を浸したり。朝夕渡る川なれハ、案内志らぬ人ハ在留間敷けれと、某瀬ふみ致さんと黒き馬に打乗て、緋威の鎧を着し真先に渡しける。其時掃部・鈴木富右衛門・笠松甚助・其外の者共、我劣らじと一度にさつと打入、向の岸にかけ上る。熊代左近申されけるハ、山本ハ存る旨何れハ秀吉公へ從はず、たとへ此合戦に勝たり共、運を開かんとおもはれず。命義あつく頼し、花々敷軍して名を後代に残さんと思ふ也。我とおもはん者共ハ、組んで熊野武士の手並の程を見すへしと、敵の中へ駈入ける。寄手の方ニも井尻三太夫と名乗りて戦ひしが、太刀を捨引組んで、井尻の鞍の前輪に引寄、首掻切て高く差上げ敵の中へ投入ける。寄手の軍勢是を見て、一騎も残さず討て取れと、追つ返しつ戦ひける。命生て又いつの世にか逢ふべきとて、只切死にせよと呼ハつて、一足も更に引さりけり。山本が一騎當千と頼つる眞砂次郎七郎・田上五郎太夫も深入りして討れにけれ。寄手の方ニも服部一兵衛・田上左京に討れけれ。桐野孫作ハ大勢の中へ駈入て、二人伐伏・五人に手負セ息を繼で居りしが、深見又太郎と槍を合、川端にて孫作又太郎に討れけり。上方勢いやが上に重り號呼んで戦ひける。味方ハ川を後に置けれハ、一足も引様なし。死物狂ひにぞ切合たり。足輕・百姓共ハ後をさへきり、雨降る如く弓・鉄砲を打懸て思ひもよらぬ方より、敵出るを見て叶はじと思ひけん。味方の手負をも助けず越後守ハ三宝寺へ引取て、朝来村大内谷に陣を取、上方勢ハ手負・死人多かりけり。

直春小松原の恥辱を雪ぐ事

四月朔日近露村へハ、仙石權兵衛・尾藤久右衛門・藤堂与右衛門・其計凡千五百余騎にて向ひける。湯川は塩見峠へ出張を構へ、弓鉄砲を揃へ待懸た里。敵是を見て云。甲斐なく小松原を開逃したる湯川ハ、いつくに隠れ居るとも、何程の事か有へき、踏ちらせとゑひく聲を出して責ける処を近々と引受け、田端六郎太夫・脇田七郎右衛門・小切間左近・林兵庫・百姓共ハ、木の下・岩の陰の横合より、弓・鉄砲を放ち掛けたり。一騎打の細道・或ハ谷を隔てけれハ、駈合て追ちらさん事も叶わずして、的に成て討れける。殊更山に馴たる者共なれハ、爰やしこに走り迫りて、おもふ儘に働きければ、敵志とろに成て引色に見へける処に、直春進めや者共と下知をすれバ、嶋右馬允・玉井新兵衛・玉井善右衛門・平井掃部・加藤大内藏・津村・高垣・丸山与次郎以上八人、とつと坂を追ひ下し、指詰引詰散々に射落しける。強弓矢儘□やに射ける事なれハ、何かハ以てたまるへき。矢場に十三人射落しけれハ、上方勢たまりかね麓をさして遁たりけり。大勢の引立たる習ひなれハ、一度も更に返し衛ず。仙石權兵衛・尾藤久右衛門漸く田邊へ引き返しける。扱々此の直春も、小松原の恥を雪れけり。此合戦敵の方も名ある者共多討連ける。味方の中も田中重太夫但馬等、一騎當千と頼みし者共討れけり。扱其後敵ハ田邊に集り居て、此間の負軍に率爾に懸る事もなく、人数を出し小せり合計りにて、墓々敷軍ハなかりけりと、今ハ大軍を以て先山本を退治すへし。又近露へハ山林に火を掛けて、敵の在所を見立て山々を取切り、城内へ追込んでや、討んと評義取々成る由。山本も爰にてハ始終叶はじとやおもはれけん。下川へこそ引れけり。寄手是を聞き、後を慕ふて追かけ一の瀬の恥を雪けと呼ハリけり。山本はかちや川を渡り、覗きの橋を引放ちて待かけたり。山本平助・熊代・深見

等小野沢の下陰より、鉄砲を繁く打掛けられハ、大勢討るゝ計りにて、はか行くへきとハ見へさりけり。敵の後をさへ切らるゝなど、仕出したる事もなく、又田邊へ引返す。斯の如く寄手ハ大勢なれ共案内を志らず。味方ハ小勢なれとも案内知たる上、心を一ツにして殊に難所に待請掛、引心に任せければハ、戦ふ度毎に勝ずといふ事なかりけり。山林より駆入て、敵に在所を知らせず、或ハ夜討又ハ兵糧を奪ひ、陣屋に火を掛け、様々寄手をなやまし、三月より七月中旬ニ至る迄、方便をかへて責けれ共、さして仕出したる事もなかりけり。湯川不肖の身を以て秀吉公へ敵對し、数旬大軍と鉾先を爭ふ事、數代熊野を領し一族廣く郎等二心なき故なり。其後秀吉公より和睦に成り、直春ハ田邊の奥三ヶ所へ籠り、居玉ひしかハ、家中の面々も暇玉ハリ、おのが様々に成り行ける。中にも旧功の侍十三人を召出し、忠勤褒美の手形を給ハリしかハ、各々感るひを流し以て、住所へ皈りけり。

湯川・山本を謀殺され玉ふ事

天正十四年四月本知安堵あるへき旨ニ付、直春和州郡山へと参らるゝと聞へしかハ、直春の家の子ハいふに及はず、旧功厚恩の侍共喜悦の思ひをなし、爰やかしこよりはや集り、三百余人直春の御供して、和州郡山へ相詣る。則町屋ニ宿を定め數日を送りたまへとも、何の御沙汰もなかりけり。直春元より浪人の事なれハ、兵糧たまるへき力なかりしかハ、何れも自飯米にて相諾、主君直春本領安堵を今かくと相待ける。飯料次第に尽しかハ、力なく一人づゝ暇を乞ひ、又暇をも乞はずして皈國する志多かりけり。去る程に熊野を出し時、三百人と聞へしかず、残り少に成にけり。直春も何と成る事やらんと、行末心細くおもはれける。山本主膳は城を圖書に預け置、玉置主殿・田上吉之丞・田上甚太夫・田上久市郎・田

上平太夫・深見又太郎・深見新右衛門・原四郎右エ門・森福太夫・堀重右衛門・笠松樫太夫・玉置藤十郎を召具し、藤堂佐渡守の居城峠に入給ひしが、二十五歳を一期として、風呂屋の中にて討れ給ひける。郎等一所に集り熊野を出し時より、斯有へきハおもひ設けて居たりしぞ。敵ハ何十人有共目ざす敵ハ只一人、佐渡守を討捕れと、奥をさして切て入、兼て用意の事なれハ、大勢駆出中に取込て討たんとす。思ひ切たる事なれハ散々に切合、半時計戦ひ三十五人切伏、名を後代に留めける。中にも左近之丞・田上吉之丞ハ、死する迄も人手に掛らずと、大勢を切拂ひ、高き所にかけ上り指違へてぞ死したりける。湊右京は其場を切ぬけ落て行。深見又太郎ハ高野山へ落行、不動坂にて討連にける。身の成行ぞあはれなりけり。

湯川十二代中務少輔直春討死の時ハ、天正十四年五月廿日也。今に至まで毎月廿日、日高郡藺御坊所にて祥月銘日懇んころに弔ひける。尤も直春の絵像御堂に納連る也。御坊湯川建立の由来をたづぬるに、十一代民部少輔直光の代、戦ひに打負あやふき所、漸切抜難波御坊へかけ入たる。證如上人に對面して直光難戦の次第細々物語り、大ニ入魂に相成りける也。夫より上人いろくいたは里置給ひ。其後騎馬三十人の兵を相添へ、南紀日高郡小松原の居城へ送り来りける。直光此恩を如何にして報せんといろく心を碎き、同郡吉原浦と云所へ、九間四面の草葺きの御堂を建立しける。され共然べき靈佛なかれハ如何と思案の内、正敷口なき靈夢を蒙りしかハ、直光草々靈夢にまかせ、彼地に駆行けれハ、果して光明赫耀たる彌陀之尊像、山の片原に在りけれハ、直光思わず地下に跪き、靈夢の應驗むなしからざる事を感嘆し、漸取上ヶ召連し家来ニ脊負はせ草々皈城なしにける。

此靈佛と申ハ、在田郡星理尾山神光寺の阿弥陀佛也。其頃乱世なれハ、悪人共此寺に入込ミ居り、寺中をあらし右靈佛を引出し捨置しに靈驗阿らたの佛なれハ、直光の應志の功なるを感じた玉ひけるにや夢の御告を蒙りしハ、廣大無邊の大功德ならず哉

然連ハ右靈佛を本尊として、四町四方に諸役免許す。則直光の次男治部少輔法春

出家して入道祐存と改名し此寺に住居す。初ハ吉原浦に建立今の松見寺御堂の所也なれ共土地

宣からず迺、藺浦の四町四方をひら記、御坊所と号す。是子息直春建立成と云然るに眞宗？庄園

に充、國・郡に隘といへとも、未だ御坊に安置せる開祖の御影とても阿らされバ、

祐存入道？難波本願寺へ上り此趣訴へける。上人證自身の姿絵寫させて住持に与へ

らる、裏書吉原坊舎常什物とあり祐存是を得てあまりの嬉しさに涙と共に押戴き、頓て奉して御

坊に安置し奉り恭敬とも嚴也。則今御坊に傳ふる御影宝物となしける。是より宗

風弥盛んにして、次第に末寺三十六余寺になり、他力本願を請ぬ者こそな力りけ

り。されハかへる靈應あらた成る尊像なれハ、衆人仰ぐべし尊むべし信春入道祐存隠居して秋蟬と云う

八十二歳にて死す湯川安藝守子息九歳成るを、信春入道祐存へ預け置、後出家して祐圓

と云。此人吉御坊住職、二世・三世ハ祐圓養子藺浦津本七右衛門といふ者なり。

七右衛門四男熊四郎祐圓娘玉といふ女熊四郎に嫁す。熊四郎剃髪して祐玄と云う。

後号眞弓四世祐賢、妻高家村竹の花塩路氏の娘なり五世秀賢秀賢兄正賢富安庄入山村三宝寺住持なり六世賢藝高家村西園寺七世

芳養泊り城責の事

兵は凶器なり・戦ハ運徳なりとハ、陶米公が越を亡し秀言なり。然連共其上古のしかれども事にして、當世の時勢に合ず。奇謀を用ひて大軍を破にハ、孫呉が説きし兵書格言にして、戦國の兵家に尊む所也。さ連ハ湊右京ハ夜を日に繼て熊野に立販り、

郡山にて直春生害し、峠にて山本討れ給ひし事、侍共討死の有様委敷語り、我等も兎にも角にも成へき身の云甲斐なく立廻り、旁々面を向ふる事本意にはあらね共、御後の事心えなくて、我身の恥をかへり見ず、斯く知らせ申さん、とつれなき命なからへて、二度御目に懸る事に惜き次第^と涙を流しける。是を聞人斯く有べしと知るならハ和睦をも用ひまし、討死を遂へきに敵の謀に落入、やみく^と討せ申せし事、我らの不覚なり。いか成子細有ハとて、口一揆^をを結び越後守に向ふ事蟻螂が斧なるへし、兜をぬき弓の弦をはつし降参し玉へ。我に能々計らひ一命を助べしと誓ひける。湯川太郎馬に乗出し右京むかひいひけるハ、弓矢を以て討取る力なし。湯川・山本程の大將をいつわり討事や有る。君憂ふる時ハ臣恥かしめらる、君恥しめらる時ハ臣死と云り。我々命生て何かせん、越後守を討取て、此辱憤を報せんと一文字に懸りける。兼而案内は知たる山本權之丞。鈴木刑部・脇田三郎・糸川官右衛門・榎本治郎・丸山主計劣らしと責上りける。弓鉄砲を打合ひ、矢種尽ぬれハ散々に切逢たり。越後守是を見て知明院討すな・原討すなど場内より討出たり。栗山三郎治郎・右京と槍を合せ突合しか、栗山突伏られて討れけり。笠松甚助岩を傳ひ後へ廻り、頓^{やが}て右京と討取けり。右京ハ隘^かれなき大剛の者なりしか、終に爰にて討れける。寄手ハ思ひ切つたる兵者共なれハ、討取り突く事もせず、追立^く責にけり。爰に城の内より中嶋吉太夫と名乗り掛、主計と槍を合せ戦ひしが、もじりをとき槍の柄を取延して、中嶋の甲の鉢を破り碎よと、つ、けさまに打ち少し怯^{ひる}む処を、馬より突落とし首をかへんとする処を、城の者共取て返し、既にかふよと見へしが、寄手も主計を討たせじと、岩打波の返すが如く一度もとつと掛りけれハ、二人の者共危き命たすかりけり。去る程に越後守もた間り兼ね、城内へ引退き木戸を打って防ぎける。寄手城を取巻鉄砲を打かけ、今宵の中に責落^{おひた}さんと、揉ミに揉んで責掛りける所に、日も暮方に俄に空かき曇り、雷電^{おひた}敷^た敷鳴渡り、風雨烈敷海上あれ、白浪山の如く岩を碎き震動せしかば、敵も味方もおぢおの、き、心ハ矢竹に思へ共、雨を防ぐに便りなく、雲

の晴るを待ん、寄手も困みを解き退きけり。日の内に責落すへきと思ひしに、
搦手の大將龍神が遅参せし故、合圖相違し手延に志つる事よとつぶやきける。越
後守ハ早魚の雨を得たる如くにて、人数を集めて弥いよいよ用心嚴敷ぞみえにけり。其
後城は次第に強く、寄手ハ漸くおとろへ、或ハ名を惜ミ自害するも有。多くちり
くくに落行けり。世に随ふ習ひなれハ、夫天下ハ其人の天下に有ず。天下ハ則天
下の天下也と肚致し。安房宮の賦ニ残せしハ、万代不朽の一言也。文明・應仁よ
り天下糸の如くにもつれ、瓜の如くにわれ、國々の英雄蜂の如くに起りて、所々
兵乱止事なけり。足利尊氏の徳義も、終に十三代義昭公に至て、織田信長隣國征
し、武威畿内・中國残さず、其名北國あなどりにふるふといへとも、明智の爲に害せられ
玉ひ。又々諸國の大國ハ小國を侮あなどり里んに相成りしかバ、秀吉公の武威天の感じる
所にや。山崎におゐて一戦にうち勝、逆徒たちまちめつ亡す。斯くの如く朝日の
上ることく秀吉公へ随ふて、湯川の家を相讀し、子孫の繁栄をこそ待玉ふへき事
なるに、大唐まで御手に入し秀吉公に敵對し、家の亡すのみならず、名ある武士
と絶果て、た間まく残る者とても、爰こゝやかしに身を隠し、土民のことく成行け
る、武運の程こそ浅ましけれ。

湯川実記終り

能 城 系 圖

能城系圖

清和天皇ヨリ九代

八條藏人義繼

嫡子 武田九郎家房ヨリ六代

幸徳次郎有長

湯川庄司忠長

湯川 元祖
法名 玉峯

湯川庄司光長

法名 天心道誠

湯川庄司光春

法名 祖印宗源

右此時代本宮湯ノ峯ニテ天狗と渡リ逢弥太郎ヲ天狗侮リ明日風呂ニテ可集会諾ス
其内ニ銅ニテ爪十ヲ造リ扱風呂ニテ先天狗弥太良ヲ搔其後弥太良天狗ヲ搔キ夫ヨ
リ天狗退ト云其頃岩上峠ニ鬼アリ往来ノ人ヲ惱シ熊野参リ絶タリ此事都マテ隠ナ
シ此鬼退治ノ^{ヒト}単ニおゐてハ其侍所領ヲ与ニ以下ノ族ニ玉テハ財宝而上下觸来リ
弥太良家来ノ平井ト此鬼神討捕る預恩賞ニ好毎ニ大刀帶向ヘハ鬼恐テ進付マシ謀
ヲ以テ口討ト云フ弥太良女の姿ニ出立衣引セツキ先ニ進ム平井ハ下女ノ出立袋物
ヲ入戴後ニ随ヒ朧夜ニ彼岩上峠ノ退所ニ悠然トシテ天地モ響大聲上ゲ近ケジト云
フ俛ニ下女ノ平井ニ飛懸リ袋ヲムツト抓主ノ弥太郎立販リ女ノ許殆ニト云ヨリ早
々カツキノ衣脱捨大刀音高ク口トキル平井透口ナク丁と切ル主従ニ太刀三大刀切
程ニサシモノ鬼神飛口口テ地ニ倒弥太良頓テ首ヲ取ル其長七尺アリ髪ハ赤大童ニ
顔ノ色赤鬼トモ口謂年来山ニ住山賊ナリ則首ヲ持都ニ登リ（六波羅ノ時）此由言
上ス不斜御感如何年者ト口尋ニテ湯川庄司申上ル則室郡永代安堵御教書ヲ上下室
郡卜日高郡ノ堺ナル芳養庄林村城ヲ築内梅ト云フ

湯川庄司光政

法名 天源宗泉

此時人皇九十五代後醍醐天皇ノ御宇天下大二乱レテ日本ニツ分ル天皇吉野ニ移リ

座ス新田左中將義貞南ノ方爲武將足利治部太夫尊氏卿持昭院ヲ御位ニ即其身任征夷大將軍二天下ヲ論〇年久其頃紀伊國ハ庄司湯川玉置山本恩地牲川貴志荒川湯淺田邊ノ別當吉野ノ宮方ニ属ス延元五年湯川兄弟足利新將軍義詮卿ノ御手ニ属ス有田日高牟樓三郡永代安堵ノ御教書ヲ蒙リ紀伊一國ノ爲旗頭錦ノ直垂上下兄光政日高小松原二城ヲ築代々麓ニ住ス弟次良勝光ハ新宮能城村ニ住居ヲ構夫々氏ヲ能城ト云フ

湯川忠長ヨリ四代

能城次良脇光

能城 元祖

能城藏人清勝

能城治部持宗

能城式部持成

能城兵庫政清

能城右京由勝

能城二兵衛勝重

此時畠山右京大輔高政天下管領職河内和泉紀伊三ヶ國ノ守護河内國高安濱ニ住域永祿五壬戌春三好修理太夫謀叛ニテ高政當國ニ下向アリ湯川直光ヲ始トシテ能城湯川一堂ハ國元ノ武士ヲカタラヘ合上洛泉州久米田ニテ三好実休ヲ討死河内飯盛ノ城三好修理太夫楯ツ籠候テ和泉河内紀伊三ヶ國ノ勢五萬餘騎旗以テ取巻四月五日ヨリ五月十九日マテ手痛攻メルトイエ共三好堅固ニ相抱致高政高野ニ在リ湯川直光飯盛ヨリ取テ出戰所ニ修理太夫弟三好摂津守後詰遁直光討死シケリ

湯川家ニテハ湯川右衛門太夫兄弟同甚太夫添上野同紀伊人数七十三人一所ニ討死國元ノ武士二八目良兄弟神保安宅新助父子貴志白樫富田飯沼九郎左衛門龍神刑部彼是五十四人根来寺人數貳百餘人合三百餘同日討死ス

林兵庫兄弟ノ内弟討死ス能城二兵衛勝重林兵庫ニ申ケルハ直光ノ死骸ヲ片付小手草摺ヲ持販リ直春江注進可申ト言合セ摂津國に遁退播磨國明石より舩ニ乘リ日高小松原ノ城江落着直春江抔由ヲ申小手草摺ヲ渡漸ク休只シ夫ヨリ三番組澤村ニ去

居ヲ構江貳拾余年住ス処二天正十三年乙酉三月二閏白秀吉以當國二進発同三月二十
二日根来寺御退治夫より太田城御攻ノ内二日高小松原ノ城江討手ヲヒ向候由ニテ
直春三郡ノ武士ヲ集メ由候付能城二兵衛勝重小松原二馳着防戦評定逼ルノ処ニ寄
手陸ハ鹿ヶ瀬比井崎三穂沖より兵船續々海陸雲霞ノ如ク向フト聞にケレバ國元面
々ニ巳力様々ニ落行候直春モ此上ハ力ナシ一先熊野江落行山林ニ敵ヲ引受ケ戦ン
ト小松原ノ城ヲ落相随侍能城仁兵衛勝重湯川安藝入道宗度同兵部太夫（上野城主）
式部太夫（泊リノ城主）治部少輔春信頼平井掃部頭勝信嶋右馬允弘春脇田六良右衛
門俊忠同藤六俊撰津村式部丞信秀林入道栄仁春當栗山三郎俊次玉井新兵衛□彼
是貳百餘人卯月二十六日小松原ノ城二火ヲ懸ケ其夜芳養殿ノ城落着明二十七日芳
養ノ奥龍仙山ニ立籠リ夫ヨリ近露横矢館に移ル落散タル侍一人宛横矢館ニ集ル湯
川三百餘騎トナル寄手ノ仙石権兵衛秀久尾藤甚左衛門一也藤堂与右衛門高虎蜂須
賀彦右衛門政晴宇野若狭守青木勘兵衛杵若越後守以上七人其勢三千餘騎芳養泊リ
城ニ入替リ田邊ノ者陣ヲスニ在々所々堂社佛閣民屋桑田拂農夫モ山林ニ遁散家業ヲ
忘タリ寄手田邊ヨリ人数ヲ出シ湯川方ニモ山本主膳頭安忠五千餘騎相加リ日々軍
無止時寄手雖多勢□□案内ヲ味方小勢ナレトモ難所□□相防戦フ間五月上旬ヨリ七
月中旬迄□□ニ攻戦トモ不哭□□負擔ニ扱ナリ人質ヲ替シ軍落着シテ俗當國一乱ト云
フナリ七人ノ大將湯川山本ノ人質ヲ連レ大和郡山ニ出ル因之紀伊國八大和大納言
秀長公ノ御領ト生リ杵若越後守爲代官田邊上江野城ニ住
明天正十四年春湯川山本郡山江御召出本質無相隨□□ヒ下旨依仰召月日ヲ送ル處七
月ニ湯川直春毒害ニテ死ス山本主膳頭安忠找第上ト心□□郡山ニ越大和ノ東家ト云
所江落□□切腹シテ相果ル能城仁兵衛勝重モ此節ヨリ浪人文祿癸巳六月三番澤村
ニテ相果ル

あとがき

- 一、湯川記、湯川実記の二書は故宇井縫藏氏によれば、徳川中期以降に作られしものな
らんと。内容虚実相半せるが如きも、比較的文章流麗、所謂戦記物の体裁多く、相
當広く読むまれしものと見え、今もかなり広く流布す。本書原本となせしものは、
湯川村富安鳳生寺藏のものにして、藤田村吉田牧野文庫の票あり、牧野至誠氏の書
庫にありしものなるべし。先に芝口常楠先生所蔵のものを書寫せることあり。今回
書写に当り比較せしに内容・字句三・四相違せるケ所あるのみ殆ど変らず。
- 二、能城系圖も同じく鳳生寺にありしものなるも、如何にして鳳生寺に由来せしものか
は知り難く、もどし二書別々のものなりしも、湯川関係のものなれば便宜上之を付
して収録する。

昭和廿八年一月十二日 寫本終わるにのぞみ

於 絃柿庵 清水長一郎

ワープロ化を終えて

父の写本した湯川実記は、副題に甲斐源氏湯川実記毛筆書きのこの本と、昭和廿四年芝口氏所蔵本をペンで写したものの、昭和四十四年に原稿用紙に写したものの計三冊ある。父のあとがきにもあるように、各本それぞれ少しずつ違う個所があり、毛筆で書きのため、私には判読出来ない文字や文章は、後述の二冊を参考にした。二冊に添えられた、あとがきも次ページに付け加える。

平成十六（二〇〇四）年七月二十五日

清水章博

一、嘉永三

いぬの正月寫之

北吉田新池

佐兵衛

昭和十四年一月うつす（御坊小学校の又寫しの本にて誤字多し）
昭和十五年七月和田喜久男氏の所蔵本によりて引合せをなす（芝口）

昭和廿四年九月十一日芝口氏の所蔵本を借りて寫し終る

清水長一郎

一、後書

湯川実記は湯川記と共に故宇井縫藏氏の説によれば、恐らく徳川中期以降に作られしものならんと云う。この宇井氏の所見はまず誤りなきものと思われるが、内容は虚実相半ばし、所謂軍記の類と考うべきである。湯川直春は秀吉南征軍の前にあえなく潰え去ったが、その悲劇的な最後は、いつまでも日高地方の人々の間に深く同情をよんだ。湯川実記も湯川記もこうした日高人の感情の所産で、その作者は知られていない。しかしこれを読んだ人々は次から次へと寫しとったと見え、今も當地の旧家の間に伝えられている。従ってその文章など各本によりいくらかの相違はあるが、大筋は違っていない。寫本の間に自ら生じた相違に違いない。私は昭和廿八年一月故芝口常楠氏の所蔵本から寫本しているが、今回大阪在住の湯川敏治氏の請により、前記芝口寫本より写す。

昭和四十四年二月十六日

清水長一郎